

職業と教育

第一卷 第五号

内容もくじ

教科書採択期迫る（巻頭言）

職業・家庭科の諸問題と考え方……島田喜知治…(1)

栽培学習に関する教育内容……中村邦男…(7)

アメリカにおける

インダストリアル・アーツ……清原道寿…(14)

基礎学力・生産教育・生活綴方

（教科研全国大会の記）……矢野敏雄…(22)

苦言……(13)

基礎学力と実践力……(21)

研究会だより・編集後記

1953

6

職業教育研究会

教科書採択期迫る

昭和二十九年採用の検定教科書展示会が来る七月五日より十四日まで、全国各地で開催される。

文部省では、それに備えて、展示会実施要綱を配布して、その正しい運営を期している。それによると、展示会開催責任者は都道府県教育委員会であり、採択の責任所在は、国立・私立を除いて、公立は教育委員会となっているが、学校職員の希望や意見が十分反映されなくてはならないと規定している。特に項を改めて、つぎのような言がなされている。

「教育委員会が採択のための方針や方法を立てたり、また学校に対して教科書選定上必要な指導助言を与える等の行政面や指導面の措置は、あくまで教育を中心とする民主的なものでなければならぬ。かりそめにも、学校職員の意見を無視したり、教職員が教科書を研究する意欲を減殺せしめるような行過ぎがあつてはならない。」

そのつぎの項では、教育委員会が一方的に

教科書の種類を限定したり、特定の教科書を指示することは、展示会開催の趣旨に反するとして、厳にいましめている。

これは、われわれが昨年度においても、強く各方面に要望したところである。検定教科書においては、出版社が苦々しいまでの宣伝や売込みを行うことは、とかく世の非難となり、教育委員会の干渉行過ぎと相まつて、教育実家は、あまりそれに近よつたり発言権を持つことをはばかる傾向さえ見られた。出版社も今年度は自粛を約束しているといわれているが、宣伝は彼等の勝手であつて、何等それによつて動かされず、よきものはよいとして、堂々と主張されてよいのである。

われわれも職業・家庭科の編集をして、立川図書株式会社から出版されたが、全然出版社と立場を異にしている。実際家による研究団体として、文部省へも意見を呈出して来たわれわれとしては、現在の教科書（自分たちの作ったものも含めて）は、決して実際的に原理的に正しいものだとは思っていない。立川図書もまた恐ろしく宣伝売込みに消極的で

かえつて編者として物足りない位である。

であるが故に、なおさら、他のものと比較研究されるより切望するのである。

勿論、われわれは、検定基準にしばられているとはいえ、その範囲内での、より本質的に近いものを志して編集したので、いくらかの自信はあるし、その採用はわれわれの研究を助けることにもなるので、大いに望むところである。

だが、職業・家庭科教科書に限つて、問題は今後に残されている。現在の学習指導要領が、われわれ実際家の立場から批判されて来たばかりではなく、産業教育中央審議会で根本的に改められつつある際、現在の教科書のままではよいとはいえない。昭和二十九年度は現在のものでしても、必ずや改正されるべき日が近いといえよう。

われわれは、その時に備えるために研究を進めつつあることは、本機関誌の読者には肯づいて頂けることと思ひ。それまでの暫定的教科書として、われわれの教科書が文部省の展示会実施要綱の線にそつて採択決定されるように願つてやまない次第である。



職業・家庭科の

諸問題とその考え方

島田喜知治

職業・家庭科教育を進める上には、まず、カリキュラムの問題があり、そうして、教師の問題があり、施設設備の問題がある。いずれも敗けず劣らずの重要問題であるが、この稿では、とりあえずカリキュラムの問題を中心としてとり上げることにする。

職業・家庭科に限らず、カリキュラムの問題は、その教科において何を学ばすべきか、どのようにして学ばすべきかの二つに要約される。職業・家庭科においては、前者はさらに次のような具体的な二つの問題となつて、わたくしたちの前に現れている。

1、職業・家庭科と他教科および特別教育活動との分解点はどこか。これをさらに具体的にいうと、社会科・理科・図画工作科などの教科や、ホームルーム・クラブ活動で学ぶべきことと、この教科で学ぶべきこととは、何を基準にして分類するかであり、いかにすれば、この教科の限界如何という問題である。

2、この教科の教育内容の個人差・地域差をどうみるか。いいかえれば、この教科の教育内容は、国語や数学のように弾力性の少ないものか、理科や社会科の程度の弾力性をもつものか、それとも

もつと多くの弾力性をもつものかということである。さらに言いかえると、男子も女子も、また、東京のまん中の子供も、山奥の子供も同じことを学ぶのかどうか、同じといい、違うというのはどういうことかという問題である。

また、後者も次のような二つの具体的な問題となつている

3、この教科の内部構造をどのように組み立てるか。たとえば、農・工・商・水産・家庭というようにわけるか、職業と家庭というように分けるか。また、今日のように全くわけないで一つの教科とし、教育内容の選択のしかたによつて個人差・地域差に応じるようにするかというような問題である。さらにまた、この内部をわけるとすると、それらを全部同じくらいづつ学ぶか。どこかに重点をもたせて学ぶか。それとも、ただ一つを学ばばよいとするかという問題がある。

4、この教科においてはどのような単元をつくつて学ぶか。いいかえれば、論理的な知識体系や技能者養成的な技能の体系と、機能的な生活経験の組織とをどの程度に強調し、どのように調和させ

るかという問題である。

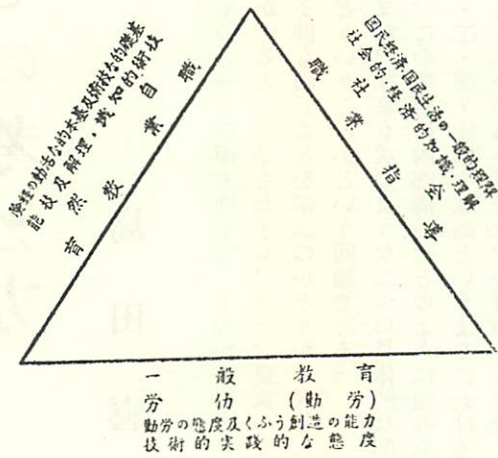
この小稿において、これらの問題を一挙に解決することはむしろ難しいが、それぞれが互に関連し合っているので、どれかを切り離して解決することはできない。そこで、きわめて大まかに筋道だけ述べることにした。

これらの諸問題の解決のいとぐちは、この教科の性格と目標の中に発見することができる。この教科では、昭和二十四年十二月以来「実生活に役立つ仕事を中心として、家庭生活・職業生活に対する理解を深かめ、実生活の充実発展を目ざして学習するものである」といわれ、実生活に役立つ仕事を中心とした学習活動を行うことによつて、この教科の目標を達成するものであることが明らかにされている。この性格は現行の学習指導要領に書いてあるからというだけでなく、おそらく、今日のような教育課程の中に、この教科が存在する限り、いくら否定しても否定できるものではないと考える。

今日、学習指導の実際においては、ただ漫然と仕事をやらせるに終つている場合があるからといつても、それはこの教科の学習方法が仕事を中心としているという性格から来る問題ではなく、学習指導法の巧拙に関する問題である。

昭和二十二年に出た職業科農業編の学習指導要領には、職業科の任務には一般教育的な一面と職業指導の一面と、職業教育的な一面があることが述べられているし、その後多くの人々によつてこの教科の性格が論ぜられるに當つて、この教科は右に社会を、左に自然を配して行つ労働とか勤労であるというところは、ほとんど定説で

あつたと見ることが出来る。その後でた現行の学習指導要領の、この教科の目標を要約しても、勤労の態度や創意くふりの能力と、社会的・経済的知識・理解と、技術的知識・理解や技能との三方面となる。また、近ごろ各所で散見するこの教科の改善意見の中に見られるこの教科の目標も、技術的・実践的な態度、国民経済および国民生活に対する一般的理解、職業生活および家庭生活における基礎的な技術の習得、基本的な活動の経験などといわれていて、それぞれ



は多少づつのずれはあるとしても、大体において図のようにならずとも三つの方向をねらつて見ることが出来る。いずれも、表現こそ違つているが、その意味するところは全く同じとみて差支ないであらう。

ところで、この教科の目標がかよりに三つの大目標から成つていくという事は、この教科の学習が仕事を中心として進められなければならないことを最も單的に物語っている。なぜならば、この三つの目標を同時に達成するには、仕事を通じての学習

を効果的に指導する以外に方法がないからである。

また、この三つの目標が同時にこの教科の目標になつていふことは、初めに述べた第四の問題点「どのような単元をつくつて学ぶか」ということに、はつきりした一つの解答を与えていると見るべきである。

すなわち、技能と勤労の態度とは実際に仕事を行う以外に身につける方法はないが、技術的な知識・理解は理科で教えることができるし、社会的・経済的な知識・理解は社会科で、教えることができる。それをこの教科に入れて大きな目標としているということは、この教科で仕事をする事と一体として学習するという前提に基づくものと考ええる。

栽培を実際に行うから、花芽はどんな処にできるかというよりな知識を、栽培と必ずしも一体としなくてもこの教科で、栽培の実際と平行に教えるというよりなことは、まだあり得ることと考えられるが、社会的経済的知識・理解とか、国民経済・国民生活に対する一般的理解といわれるよりなものになると、仕事とは一体とならないが、この教科に入れておいて、別わくあるいは、別な単元で平行的に教えるというよりな理論はちよつと考えられない。それでは社会科との区別が全くつかなくなる。こういう理由のもとに、かような知識・理解がこの教科の大きな目標としてはいつていふことは仕事をする事と一体として学習することを認めた結果であり、これを一体として学習するということは、生活経験的な学習をするということである。

また、この教科では、くふり創造とか、充実発展とか、改善向上

とかを目ざしているが、これは昔ながらの技能の訓練的な学習のしかたではとうてい到達できるものではない。さらに、この種の教育においては、理論と実際、実習と講義の一体化ということは、ほとんどすべての論者の理想としていふところであり、高等学校でも、農業科や水産科はすでに実習と関係教科のわくがはずされ、工業科でも、現在は実習という独立の科目があるが、この区別をなくする方がよいといわれている。また、工業教育において、実習の教師と講義の教師がわかれていふことは、この教育進展のためのカネであるといふべきである。これらの点を総合すると、この教科の単元は生活経験的なものとなるといふふうに考えられる。

しかしこのことは基礎的なものを軽視するといふわけではない。それを重視すればこそ、いかなるところで、いかに学ばせたら、最も効果的に身につくかという指導の組織がくふうされるのであつて、ただ漫然と仕事をやらせるといふよりなことでは断じてない。

したがつて学習指導能力の優れている教師は生活経験的なものの中に、基礎的なものを組織的に織り込んで指導できる場合でも、学習指導能力のそれほどない教師はむしろ大事をとつて、教材単元的なものをつくつて指導した方が効果的な場合もある。

したがつてこの教科には、多くの教師がくふうすれば、仕事と一体として指導することが出来る程度の知識・理解がいつて来るのであつて、それができない教師は事実上分離して指導することもあり得る。しかし、それは本体ではないであらう。

また、一体として学習するということにも、さまざまな見方がある。わたくしは、これを三つの段階にわけて、仕事の実際によつて自ら得られるもの、教師が仕事のあとさきに意識的に織り込んでお

いて指導するようなもの、各単元に個々別々に出て来たものを一括し、一般化し、足りないところを補うようなものとしている。この辺のところに、第一の問題点「他教科および特別教育活動との分解点」を明らかにする一つの原理が見出されるように思う。

つぎに、この教科の三大目標のことは前に述べたが、この目標相互の関係を考えてみると、必ずしも並列的な関係ばかりではない。技術的な知識・理解と技能というか、基礎的な技術と基本的な活動の経験といわれるようなものは、それ自身が目標であると同時に、社会的・経済的知識・理解とか、国民経済・国民生活に対する一般的な理解とかいわれるものや、勤労の態度、くふう創造の能力などを身につける上の方法的な意味をもっているものと考えられる。

これが方法である以上、生徒の発達、経験・環境、学校の事情などに応じて、いずれの内容を選ぶのが最も効果的かを考えて選択すべきであつて、画一的・固定的なものにすべきではない。ことに、国民経済・国民生活に対する一般的な理解を四肢五体を通じて体得させようとするには、彼等が理解しやすい身近かなところに窓をあけて、そこから国全体、世界全体までも見るにふさわしい内容が選ばれなくてはならない。

また、これが目標であるということは、ただ観念的に日本国民としてというよりなことで選ばれるのではなく、彼等がそれぞれの能力や環境に応じて職場職場を受けもち、それによつて自らの生活を充実発展させながら、明日の日本を双肩に背負つて立つような人になるために、中学校で何を学んでおくべきかを考えて選ぶべきである。

中学校の生徒の将来の職業はまだきまつていない。しかし、一つの学校でも、男の子供と女の子の将来の働く分野は著しい違いである。また、東京の真中のある一学級の男生徒と、山村のある一学級の男生徒の将来の働く分野を比べたら、はつきりした違いを出すことができる。

普通教育であるから、男女都鄙の別なく、ここの知識技能が画一的にきめられなければならないというのは、余りに観念的であり、形式的である。わたくしたちが問題にするのは、普通教育であるかないかということではない。普通教育とは何かという問題である。従来の小学校も国民学校も普通教育であつた。旧制中学校も旧制高等女学校も明治のころから普通教育とはつきりきまつていた。しかしその普通教育における実業科であつても、ある生徒は農業を学び、ある生徒は商業を、そうして、ある生徒は家庭を学んでいた。けれども、わたくしは決してその学び方がよかつたというのではない。

現行のものでも、普通教育と考えられている高等学校の普通課程では八十五単位中四十七単位は選択であり、必修といわれる三十八単位も、それぞれの教科の中で科目の選択が行われている。義務教育の普通教育である中学校にも毎週一ないし六時間の選択教科の時間があつて、ここでは英語をやつてもよいし、職業・家庭科を学んでもよいし、また、他の教科を学習してもよいことになつている。ことに、職業・家庭科では生徒の学びたいものや将来の職業に役に立つと考えられるものを学ぶのが望ましいといわれている。選択教科だけは普通教育ではないという考え方はどうも成り立ちそうもない。それが成り立つとすれば、職業・家庭科は必修教科であつても、普通教育ではないといつても差支ないわけである。職業・家庭

科は必修教科の部分であつても、男女都鄙の別なく一律の内容を盛るといふことはどんなものだろうか。抽象論の場合には別として、しつかり足を地につけて考えるとき、女の子供が針を持つのと同じくらいじようずに男の子も針がもてなくてはならないだろうか。また男の子供がかんな削りをすると同じように女の子もかんな削りをしなければならぬだろうか。わたくしには、男女全く同じでよいという自信はどうしても出ない。男女の差を認めるとすれば、多少の程度の違いはあるしても当然地域の差も認めるべきである。

そうすると、普通教育であるといふことでこの知識・技能の内容を画一的にきめるといふ原理は成立しないことになる。嚴密にはできないが成るべく一定にするといふような原理はありようがない。できないならば、できない事情を明らかにして、そこに、もつと地についた他の原理を発見しなくてはならない。

職業・家庭科の目標の一つである技術的知識・理解や技能が万人共通であるという点は、万人共通に求められる社会的・経済的知識・理解や態度・能力などにつらなるといふことと、個性や環境に応じて最も必要な部分を伸ばすといふところにある。しかし、まだ中学校の段階にある子供であるから、こうして各學校で選ばれた教育内容も、これを重ね合わせる可成り重なるところがあるかも知れない。しかしこれはどこまでも、それぞれの學校が自主的に選んだ結果が重なつたのである。したがつて、七〇%の學校で重なつたからといつて、これを他の三〇%の學校にまで押しつける理由はない。しかし、各學校が自主的に選ぶに當つて必要な、客観的な資料はできるだけ提供して、自信をもつて適切なものを選ぶことができるようにするべきであらう。そうすると、四類十二項目の表の各項目に

父兄に○をつけさせて社会の必要と見なしたり、生徒に○をつけさせて生徒の必要を算出するよ様な安易な結論を出すよりなこともなくなるだらう。第二の問題点「地域差、個人差」については、わたくしはこのように考える。

なお、ここに一つの問題がある。それは都市の男子は何を学ぶべきかといふことである。彼等はほとんど仕事とか生産とかいふことから遊離している。したがつて、技術的な知識・理解や技能を方法と見た場合にも、地域社会とか生徒の事情とかいふ面からは特にどれが効果的かは必ずしもはつきりしていない。またこれを目標と見た場合にも、彼等の大部分は、大学進学を希望しているような場合が多いから、具体的にとり立てて必要であるといふようなものも見当らない。

それでは彼等にこの教科は課さなくてもよいかといふと、決してそうではない。彼等は現在も仕事とか生産とかいふことから遊離しているが、もしここで学ばなかつたならば、一生これを学ぶ機会はないのである。この教科のねらうような諸目標を實踐を通じて学ぶことは彼等にとつてこそ必要であるといふこともできる。こういふ學校で教育内容を選択するよ様な場合は、相当大胆に各分野の代表的と思われるようなものを選んで学ばせるのが適當と考えられる。しかしこの場合も、図工科や理科や社会科などで本来教育内容としているものをむりに分けてもらつてきて、この教科を埋めるよ様なことは警戒しなければならぬ。それはこの教科の必要を否定する方向に向かつているからである。しかし、現実には、このよ様な特殊な學校で施設も十分でないよ様な場合は、この警戒すべき方向に

向かいやすいであろう。

この教科でねらう社会的・経済的な知識・理解や態度・能力を見失わない限り、多少のことはそれもやむを得ないかも知れない。ただしこれらのことは、このような特殊な学校においてのみいえることで、これを全国の津々浦々にまで及ぼすことは厳にいましめなければならぬ。

つぎは第三の問題点、この教科の内部構造である。農・工・商・水産・家庭に分けて、その一科目または教科目を選んで学習する方式はその科目のわくにわざわざいされたり、教師の専門に偏つたりして、純粹に、眞の生徒の必要、眞の社会の必要を各学校のカリキュラムには移しにくい。また、この全部を一人の生徒が学ぶことにすると五科目の分立であり、個人差・地域差に応じることが、すこぶる困難になる。

そこで現行の学習指導要領では、この科目のわくをはずしたのであるが、農・工・商・水産のわくをはずすると、同じ時間配当の中にある以上、どうしても家庭まで一しよにして一教科にしなれば理由が立たなくなるので、全体を一教科としたのであつて、決してCIEの強制の結果ではない。

職業と家庭とを分けたいという意見はよく聞くが、その理由は明らかでない。しかし、この同じ意見の中にも、二つに分けて男子は職業、女子は家庭を学習するという意見と、これと全く反対に、二つに分けておいて、男子にも女子にもわくづきで職業も家庭も学習させようという意見とが混在していることは事実である。この両者の中間をとつて、多少ウェイトをつけようという意見もある。

多少でもウェイトをつけようとすると、男子の職業、男子の家庭、女子の職業、女子の家庭という四本立となり、もし、共通の部分と共学にしようとする、三本立てとなり、共学の部分と単独の部分とのむずかしい関係もでる。また、このようなわくづきで学ばせることにすると、必修の中でも女子が家庭を、男子が職業をもつと学ばたいという希望はみだされなくなる。

現行のものは、たとえば女子向コースは一方から見れば大体、全部家庭であるとも言えるが、その中に職業的な内容も必要な限度には、しつかりとはいつてゐることを期待してゐるのである。いいかえれば、台所改善のところでは学ばれる設計製図は、日本の工業が彼女らに求める設計製図の基礎とむじゆんしないものであり、小遣帳や家計簿で学ばれる記帳は、簿記の基本とむじゆんしないものであり、家庭菜園について学ぶに當つては、日本の食糧問題まで出て来ることを望んでゐるものである。それが実施されないならば、職業的な内容をこういうふうに入れて入れるという基準を一つ加えればよいであろう。機能的な生活経験を組織して学習指導計画を立てる場合にはこのようなことは当然のことであるといえる。

(文部省職業教育課)



栽培学習に関する

教育内容設定の基本的立場

中 村 邦 男

一、学習内容設定の基本的立場

学習内容は、その教科の目的や性格が基盤となつて、設定されることはいうまでもない。

従つて職業・家庭科の目的や性格が「職業生活・家庭生活の改善向上に役立つ基礎的な技術の習得、基本的な活動経験により、国民経済・国民生活に対する一般的理解を養うとともに、共働的な労働の訓練により、技術的・実践的態度を養うものである」という観点に立つて、栽培の分野に於ける教育内容を考へてゆく必要がある。このためには、農業の分野に於ける現状の分析をなし、今後如何なる方向に改善されねばならぬかを追及し、その方向に改善されて行くためには、如何なる技術や知識が基礎とならねばならぬかを見定め、そのためには如何なる仕事や知識を教育内容とすべきかを決定してゆくべきであらう。

しかし、このように考へると「わが国の農業の分析」という極めて困難な問題に逢着し、その解決は簡単ではない。だが一応技術的観点から現状を見、改善すべき方向を考へることも可能であらう

し、このような論文も多い。また経済的な立場から、わが国の農業を分析した所論も多いので、これらの所論からわが国の農業を分析し改善すべき方向を考へて見ることとする。

わが国の農業や農村をどのように観るかは、細かい点では必ずしも一致した結論が出ていたとはいえないであらうが、大体つぎのよ
うな点は、多くの論者によつて一応認められているのではないだら
うか。

- (1) わが国の農村は半封建的であること
 - (2) わが国の農業生産技術が前近代的であること
 - (3) 農業が産業構成上、極めて重要でありながら近代産業として殆んど発達していないこと
 - (4) わが国の農村が過剰な人口（しかも潜在失業的）を抱えてあ
えいでいること
- 等をあげることができる。
- こうした現状をどのように改善すべきかについてもいろいろな意見があるが、極く大ざっぱにいつて
- (1) 農村の民主化を図る

(2) 農業生産の近代化を推進する

の二方向に集約されるのではなからうか。そして、農村が民主化され、農業生産が近代化されることによつて、わが国の食糧自給が可能であるとの見解がなされていると思う。

前述のように、わが国の農業問題を簡単に割り切つてしまふことは、最も慎まねばならぬことと思つているが、一応常識的に考へて、このような立場に立つことは、それほど誤りでもないであらうから、こゝでは、このような立場に立つて、職業・家庭科の栽培に關する教育内容を考へてみることにする。

二、栽培の基礎的技術

栽培の基礎的技術とは如何なる技術であらうか？

それは、つぎの二つに分けて考へられると思う。

(1) 現在の農業生産の基本となる技術——多くの作物の栽培に共通する技術——(基本的技術)

(2) 農業生産の近代化に役立つ技術の基礎となる技術——農業生産の近代化に連る技術——(基礎技術)

先づ(1)の基本的技術は、現在のわが国の農業生産において、多くの作物の栽培に是非必要な技術であつて、これは中学校に於ては男女の別なく、地域の別なく学習すべき技術で、この基本的技術の習得により、全く農業には縁のないような都市の生徒達が農業生産について理解し、更にわが国の農業の現況に眼を向け、この貧しい農業をどのように改善しなければならぬかを理解することに役立つであらう。

このような技術を見出すためには、個々の作物の栽培に於ける要

素作業を分析して、多くの作物の栽培に共通な要素作業を探り上げた。しかし、この要素作業を個々の作物について、一つ一つ考へてみると、共通な要素作業とはいへ、実は個々別々な要素作業ともい得るのであるが、大体に於て共通なステップより成り立ち、しかもある作物について、その基本的な点を習得することによつて、他の作物の栽培の場合にも応用(転移)し得ると考へたので、基本的技術とした。

つぎに、農業生産の近代化に役立つ技術の基礎となる技術(基礎技術)であるが、これは要するに、食糧の自給を可能ならしめるような農事改良的な技術に直接つながる基礎技術で、例えば農業の機械化に役立つような機械操作の技術、土地改良に連る土壌管理の技術、農業経営の合理化に役立つような作付計画の技術などで、これらの技術は、将来農業にたずさわろうとする生徒が、選択の時間に学習するのが適當と思われるものである。

さて、農業生産を近代化し、食糧の自給を可能ならしめるために必要な技術は何んであらうか？ これは勿論、単に技術の問題として、切離して考へられない性質のものではあるが、こゝでは一応技術の点からのみ考へてみると、農業改善の技術は、個々の農家が従来のように伝承的な栽培技術によるのではなく、科学的な栽培技術により、科学的な栽培を行なうことは勿論必要ではあるが、このような細かい栽培技術の改良による効果には一定の限界があるので、これのみに期待することは出来ない。

それよりも、協同的な国家的な力によつて、推し進められる農事改良の事業によらねばならぬ事は、多くの学者によつて指摘されている。例えば、水田用水施設の完備・土地改良・畑地灌漑・耕地整

理等は、農業の近代化のためには是非行わなければならないし、更に経営の合理化・農地の開拓・作業の協同化等も欠くことのできない問題であろう。しかし、これらの問題のどれ一つをとつてみても、現在の中学校に於て、直接仕事として採り上げることは、極めて困難な問題ばかりであるし、またそのために、多くの費用と時間を投じて実施することは、普通教育としての中学校に於ては、必ずしも妥当であるとはいえないであろう。

このように考えて来ると、これらの改善的技術の多くは、実際の仕事として採上げられるよりも、知識として学習するとか、見学や映画を利用して学習することが多くなるであろう。この場合も、単に仕事から遊離した観念的な知識でなく、それらの知識学習の導入としての仕事学習であることが忘れられてはならない。このような知識学習へ導入し得る仕事に含まれる技術で、しかも稍々専門的特殊的な技術や実際に学校で実施し得る農業機械の技術等を、農業生産の近代化に役立つ技術の基礎技術と考えたのである。

三、実際の教育内容（一試案）

前述のように、基本的技術・基礎技術を規定して、実際の教育内容は、つぎのような手続きによつて設定される。

- (1) 作物の栽培技術を 土壌管理・種苗管理・肥培管理（栽培管理）・育苗・肥料管理・経営管理等のブロックに分ける
- (2) 個々の作物の栽培について、夫々のブロック別に、要素作業（厳密には指導要素と言つた方がよい）を分析する（要素作業分析表の作製）

(3) 要素作業分析表により栽培に於ける基本的技術（多くの作物

の栽培に共通する要素作業）を選び出す

(4) 要素作業分析表により農事改良技術とつながる基礎技術を選び出す

(5) 要素作業分析表により夫々の作物の栽培について重点的な技術を選び出す（指導の重点の発見のため）

(6) 要素作業分析表より基本的技術、基礎技術を多く含む作物を選び出す

(7) 選出された作物が、その土地で栽培するのに適するか否かまたその学校で実施し得るか否かについて検討し、適地適作の立場より更に作物を選出

(8) 選出された作物について、栽培の難易を考えて必修の内容とすべきもの、選択の内容とすべきものを決め、更に学年に配当する（易より難へ）

(9) このようにして、定められた作物を教材として、その作物の栽培のプロジエクトを構成する

(10) 必修に於ては、基本的技術を含む仕事に重点をおき、選択に於ては、基本的技術のほかに、農業の近代化につながる基礎技術を含む仕事に重点をおいて選出

(11) このようにして選ばれた仕事に必要な技術的知識と社会的経済的知識を選出

上述のような手続きによつて設定した教育内容を、仕事、技術的知識・社会的経済的知識に分けて示せば、つぎのようである。

A 仕事

——都市向——

必修 (性別、地域別なく全生徒が学習)		選 択	
基 本 的 技 術	仕 事	基 礎 技 術	仕 事
畑の打ち起し方 作條の作り方 中打ちのし方 土寄せのし方 肥料の配合のし方 堆肥の作り方 施肥(元肥追肥)のし方 播種のし方 移植のし方 苗の鑑別のし方 間引のし方 除草のし方 害虫の駆除のし方 病気の予防のし方 灌水のし方 摘シンのし方 人工授粉のし方 冷床の作り方 収穫のし方	草花栽培—露地 (一二年草、多年草、球根) 果菜類の栽培—定植から (かぼちや、なす、余蔘きりり) 葉菜類の栽培 (こまつな、さんとうさい) 根菜類の栽培 (こかぶ、だいこん、三寸にんじん)	土壌検定のし方 酸性土中和のし方 床土の作り方 培養土の作り方 腐葉土の作り方 種の消毒のし方 種の予措のし方 種いもの植え付け 温床の踏み込み方 温床の管理のし方 摘芽のし方 挿木のし方 除けつのし方 採種のし方	草花の栽培—鉢植 (あさがお、きく) 果菜類の栽培—種から (かぼちや、トマト、なす、節成きりり) 葉菜類の栽培 (結球白菜、たまな、ほうれんそう) 根菜類の栽培 (大長にんじん、ごぼう) いも類 (さつまいも、じゃがいも)

— 農 村 向 —

必修 (性別、地域別なく全生徒が学習)		選 択	
基 本 的 技 術	仕 事	基 礎 技 術	仕 事
畑の打ち起し方 作條の作り方 中打ちのし方 土寄せのし方 肥料の配合のし方 堆肥作り 施肥(元肥追肥) 播種のし方	草花の栽培—露路 (一二年草、多年草、球根) 果菜類の栽培(定植から) (かぼちや、なす、余蔘きりり) 葉菜類の栽培 (さんとうさい、ほうれんそう) 根菜類の栽培 (だいこん、三寸にんじん)	床土の作り方 選種のし方 種や苗の消毒のし方 種の予措のし方 温床の踏み込み方 温床の管理のし方 練床の作り方 土入れのし方	穀類の栽培 (いね、むぎ) いも類の栽培 (さつまいも—種いもから) まめ類の栽培—水田裏作 (だいず、そらまめ) 果菜類の栽培—育苗から (なす、トマト、かぼちや、節成きりり)

種いもの植付け方 移植のし方 苗の鑑別のし方 間引のし方 除草のし方 害虫の駆除のし方 病気の予防のし方 灌水のし方 摘み採りのし方 除けつきのし方 人工授粉のし方 冷床の作り方 土壌検定のし方 酸性土壌の中和のし方	いも類の栽培 一苗の植えつけから {さつまいも {じやがいも	坂わたらの敷き方 霜除けのし方 日陰のし方 支柱の立て方 藤引のし方 摘み採りのし方 摘み採りのし方 剪定枝のし方 整枝のし方 挿木敷のし方 挿木敷のし方 挿木敷のし方 挿木敷のし方 挿木敷のし方	根菜類の栽培 (大長だんじん、ごぼう) 葉菜類の栽培 (船球白菜、たまな、たまねぎ) 草花の栽培—鉢植 (きく、朝顔) 果樹—手入 (なし、くり、もも)
---	---	---	---

〔備考〕

- 1、必修はすべての生徒が共通に学習する。
- 2、選択は必修の学習の発展として学習する。
- 3、それぞれの仕事に於て()の中に、いくつかの作物を示したが、これ等の作物の中から、その学校で栽培するのに適したものを一—二種類を選んで学習する。栽培する作物はなるべく少くし、充分に学習することが望ましい。
- 4、必修に於ては、春は草花、夏は果菜類、秋は葉菜類と根菜類の々各について一—二種類の作物を栽培し、冬から春にかけては「じやがいも」の栽培をするようにしたい。
- 5、都市の中学校で、校庭もコンクリートで、殆んど土のない学校でも、校舎の周囲や校舎の裏等適当な場所に畑や花だんを作り、環境の潤化を兼ねて学習すべきであるが、それさえもできない学校では、草花栽培のみを採り上げ、箱植えや鉢植え等によつて、栽培の基本的技術を徹底的に指導する。

B 技術的知識(都市・農村共通)

基本的技術・基礎技術の習得は、ただ経験的に習得するのではなく、個々の技術の裏付として技術的知識の習得を必要とする。技術的知識の裏付けを以て技術が習得されてこそ、その技術の正しい改善が考え得られるわけであるから、この技術的知識は極めて大切である。

一つ一つの技術については、それぞれ裏付けとなる知識があげられようが、それ等を詳細に記する紙面がないので、技術的知識として具備すべき条件についてのみ記することとする。

- 1、原理的な知識は理科学習に譲ること
- 2、原理を応用するのに必要な知識であること

例えば、移植の生理・発芽の生理・日照時間と作物の生育の關係等主として農業植物生理的なもの

- 3、土壌に関する科学的知識、例えば土壌の種類と作物の生育

の関係等

4、肥料に関する科学的知識、例えば肥料の種類と含有肥料成分、肥料の配合と肥効の関係、脱窒現象と施肥法の関係、栄養週期と施肥法、新しい肥料の性質と用途等

5、害虫や病気の防除に関する科学的な知識

例えば害虫や病気の発生条件、新しい防除薬の性質と効果等

6、農業経営に関する知識、例えば輪作の問題、労力や土地の生産性、労力の配分と農作業の能率化等

7、農業機械に関する知識、例えば農業機械の種類、性能、使用法、人力作業と機械力による作業の能率等

以上は、極く大づかみに技術的知識をあげたのであるが、これらの知識を最も効果的に学習し得る仕事とともに習得させるように考慮しなければならない。

以上は、極く大づかみに技術的知識をあげたのであるが、これらの知識を最も効果的に学習し得る仕事とともに習得させるように考慮しなければならない。

C 社会的経済的知識（都市・農村共通）

従来の社会的経済的知識は、職業指導的な知識に偏向し過ぎていたようであるが、こゝで学習すべき社会的経済的知識は、決して職業指導的なものではなくて、むしろ産業社会の改善向上に役立つようなものでなくてはならない。従つて、栽培の仕事に伴つて学習される社会的経済的知識は、わが国の農業の実態を、正しい姿において把握し、その改善の方向を理解することに役立つべきものでなければならぬ。その主なるものを示すと

1、郷土の農業生産の実態の理解

2、わが国の農業生産の実態の理解

3、わが国に於ける農業と他の産業—ことに工業—との関係の理

解

4、農業生産の改善の必要とその方向に関する正しい理解

5、農村生活の実態とその改善の方向についての正しい理解

6、農作業の安全や能率と休養に関する理解

等であろう。これらの知識を更に分析し、実際の仕事との連関に於て学習し得るようにすることが必要である。

四、結 び

以上述べた事は、産業教育審議会案に示された、本教科の目的及び性格に沿うた栽培に関する教育内容の一試案に過ぎない。省みて分析の不徹底な点は掩うべくもないし、また余りに独断的に結論を出して割切つて了つた点も多い。更にまた、実際的には従来の教育内容と殆んど異なる点もなく、必ずや多くの批判のある事と思う。栽培に関する学習内容を如何にすべきか」という問題は、本研究会に於ても、しばしば討論されながら未だに明確な結論を得ていないのに、この問題を引受けてしまつたことは間違ひであつたと今更ながら反省される。

しかし、或る学校では机上で麦を作り、或る学校では増産教育に傾き、また或る学校では勤労教育に傾いて、混とんとして定まる所のない、現在の職業・家庭科の栽培に関する学習に対し、ある一定の方向と性格とが少しでも明確にされ、背負い切れぬ程の仕事の内容にも、教師も生徒も仕事に追い廻され、疲れ果てたような現状を打開することに、少しでも役立ち得れば望外の幸である。

（東京都枯中学校教諭・本研究會幹事）

苦言

◇学者

「教育技術」の六月号に、職業・家庭科教育についてのアンケートがのつている。五名の回答者のうち四名が中学校長であり一名は学者である。その回答をみると、職業・家庭科教育の本質について、学者の答えだけが他の四名の教育実践家と全くちがつている。

この学者の回答によると、職業・家庭科は、啓発的経験を与えることにその使命がある教科であり、必修時間のうち一時間は職業情報を与うべしとのべている。この考え方は、現行学習指導要領が出される以前の二四年五月の通達の線を固守していることであり、現場の教育者たちが、正しい職業・家庭科のありかたについて実践的研究を近づけつつ、現行の学習指導要領をも克服していこうとしている時期に、現場を知らない学者た

ちが、いかに不勉強であるかをしめしているといえよう。このような考え方は、職業・家庭科が中学校の必修教科として独自のねらいをもつことを無視し、職業・家庭科の教育を「職業指導」に従属させようとするものである。

この学者の現場実践への眞摯な研究の不足は、職業コースと家庭コースの分離についても、その現状の無知ぶりを露呈している。「男女生徒にひとしく職業生活および家庭生活に關して理解させ、かつそれに必要な仕事の体験をさせるという目的」から分離すべきでないとする理由がどうして出てくるのか。ねらいがちがい、学習系列のちがうものを一つにしたために、現場ではかえって混乱を引きおこし、男子は職業生活の、女子は家庭生活の学習だけに終つてい

このアンケートからも知ることができる。

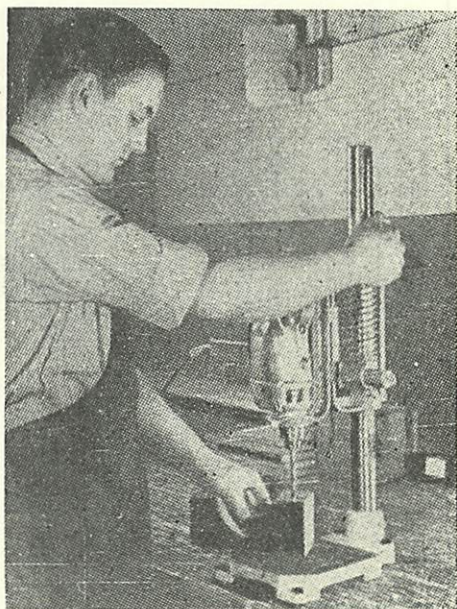
◇テスト

最近ヨーロッパの旅行から帰えられた勞研所長、桐原保見博士の報告は、各種のテストに狂奔している中学校の職業指導に反省を与えるものといえよう。それによると、職業指導のためのテストは、その成績よりもそれをする過程の行動観察が重視されていること、しかもテスト係りは概ね多年の経験を積んだ臨床心理学の専門家が必ずみずからテストをやつて観察し、助手にはやらせない。二、三年前に出版された日本の中学校の報告では、生徒同志がテストをやつている写真が麗々しくついていたが——しかもテストだけに大い一日かかっている。それはあたかも名医が患者の病気を診断するにている。「いやしくも人間一人の一生の職業をきめるのであつてみれば、これは至極当然の話であるけれども、日本のやり方、とりわけテストの如きは甚だ心もとない。正確な見通しや万全の利用がな

されないものを行つたのでは、無益というよりも有害でさえあるだろう」

これらの言葉が心理学者である桐原博士のものだけに、われわれ中学校教師は深く耳を傾けるべきである。テストは一見、「科学的」であるかのようにみえるだけに、テストマニヤになりやすい。しかも科学的には「甚だ心もとない」テストをあれこれやつていれば、職業指導に熱心な学校であるかのように自己満足している「研究校」もしばしば見うけられるところである。テストを一つつくれば、その心理学者の生活は保証される現状だといわれている。したがつて非科学的なテスト・マニヤはこのような心理学者の生活には大いに貢献しているわけである。しかも貢献してやらなくてはならない生徒たちに対しては、テストの限界を無視して「適性」をおしつけ、レッテルをはつてい

(A 生)



〔海外資料・アメリカ〕

中学校における

インダストリアル・アーツ

清原道壽

一、はし が き

戦後の中学校において、職業・家庭科が必修教科としてとりあげられたが、普通教育のなかで、この教科を必修として、なぜとりあげるかについての十分な説明がなされなかつた。そのため職業・家庭科の職業課程は、かつての職業準備教育や「職業指導」であるかのように考える教師が多く、職業課程の教育は中学校卒業後に就職する生徒にとつては必要だが、進字者には不必要だといった考え方が一般的になお強く残つているといえよう。

今度発表された産業教育中央審議会案の「中学校の職業・家庭科について」において、普通教育として職業・家庭科をなぜ必修とするかについて説明を与えようとしていることは、現行の学習指導要領の不得要領さに比ぶれば、その進歩性を認めることができよう。

産業技術の基礎的陶冶と、それを通じての産業についての一般的理解をめざす教育が、普通教育として必須であり、教育の中核とならなくてはならないことは、二十世紀以来の人類の教育の基本的な考え方であるといえよう。

われわれが、必修としての職業・家庭科のありかたを究明していく参考のために、アメリカの中学校において、普通教育として産業についての教育をどのようにとりいれ、そのねらいをどう考え、どう実施しているかを最近の資料^(註)によつて紹介することにしよう。

注 A. B. Mays: Essentials of Industrial Education 1952

First Edition p. 156~167.

F. Th. Struck: Vocational Educator for a Changing World 1949. Fifth Printing p. 30~35.

Industrial Arts and Vocational Education; Vol. No 10

Los Angeles City; Outline. Course of Study, Industrial Arts Junior High School 1945.

岩波教育講座 第三卷 一五九—一七一ページ

都崎雅之助・アメリカの職業指導と職業教育一四一—一六六

ページ(文教書院 一九五一年)

長谷川 淳・アメリカにおける産業教育(日本教育社会学会

編 産業と教育 東洋館出版社 一九五二年)

長谷川 淳・教育における職業分析(職業指導の心理 金子

書房 一九五三年)

二、アメリカにおけるインダストリアル・

アーツの沿革

南北戦争(一八六一—一八六五)によつてアメリカは国家的統一がなり、アメリカ資本主義は全国を一つの経済単位として発展する段階にはいつた。そしてアメリカの資本主義経済は急速に発達し、一八九四年には工業の生産額は世界第一位となり、その額は欧州全国に匹敵するに至り、今まで先進資本主義国として繁栄をつづけてきた大ブリタンの二倍の生産額をあげるに至つた。このような急速な経済的發展に関連して、技術の進歩は著しいものがあつた。エジソンが電球を發明し(一八七九年)発電所が建設され(一八八〇年)またベルによる電話(一八七六)フォードによる自動車(一八九三年)と新しい技術がめぐるましい発達をしたのは、南北戦争後の約三十年間においてであつた。

このような時代の変化に應ずるためには、アメリカの従来の教育

は、なんらかの形で脱皮せざるを得なくなつた。ここにおいてマサチューセツツ州のボストン市の教育委員会は、工業的な学校をつくることをきめ、一八八〇年には男子のために木工技術を履習する学校が開かれることになつた。このことはボストン市に限らず、同時期にイリノイス州のセント・ルイス市においても手工学校が開設され、その後、このような教育運動は各地に拡がつていった。そして一八九八年になるとボストン市においては、従来のグラマースクールやハイスクールの男子は、手工(マニュアル・トレーニング)を義務的に課されるにいたつた。

これらの教育運動の發達に理論的な貢獻を与えた最初の人としては、ワシントン大学のウッドワードをあげることができる。かれによると、学校は青少年に産業のプロセスを理解させ、青少年のまわりにある主要な産業に役だつしごとの能力を身につけさせるべきであるとし、そのためにはマニュアル・トレーニングを学校にとりいれることが最も効果的である。このマニュアル・トレーニングを学校にとりいれると、学校の一般教育を豊富にし、学校教育を生活に應じたものに行ふことができる。

また青少年たちが、急速に發展しつつある産業において、熟練者となるばあいに、学校においてマニュアル・トレーニングを学習しておくこと、熟練者に必要な技能と技術的知識をより速やかにより効果的に身につけることができるとされていたのである。

このような手工教育運動にたいして、はじめの間は一般の教師からの反対もあつたが、一八九〇年代になると学校教育におけるマニュアル・トレーニングの重要性が認められるにいたつた。それは當時の一般の学校のカリキュラムによつて準備されている知識や訓練

が、その時代や青少年の要求とあまりにかけはなれてゐるし、それを改革するには学校にマニユアル・トレーニングをとり入れることが最良の方法であると考えられるようになったからである。かくて小学校の上学年にまで手工がとりいれはじめたのである。

この手工教育の運動に画期的な変化をきたしたのは、一九〇〇～一九一〇年の間においてであつた。この時期にアメリカの資本主義は帝国主義の段階に入り、対外的にはフイリッピンの植民地化、キューバ・パナマの保護化、中国への門戸解放の要求などにあらわれアメリカの商品は世界各地に奔流のように流れてたし、国内においては、アメリカはトラストと独占の国となり、ロツクフェラー、モルガンなどの大財閥が確立されていつた。このような時代を背景として職業教育運動がおこり、従来の手工教育は、いかなる職業の目的にも無関係であり、職業教育として役だたないとの批判がなされたのである。一九〇六年のマサチューセツツ州工業教育委員会報告書に指摘するように、手工（マニユアル・トレーニング）は特定の職業分野における実習をほとんど与えていない。目的が不明瞭な、いかなる職業の目的にも無関係なものである。このような手工では職業や産業を理解するには役だたないものと批判されたのである。

このような批判にたいして、手工教育運動の教師や指導者たちは作業をより職業的になそうとする努力と研究をつづけ、その結果、工場の生産方法が研究され、それを学校の作業のなかにとりいれるように努めたし、現代産業のプロセス、課題、国民生活における産業の重要性についてのインフォメーションを生徒たちに与えるようになった。そしてこのような教育は、普通教育としての中学校の

プログラムにも拡げらるべきだとされ、普通教育の段階の教育をインダストリアル・アーツとよぶようになった。したがつてインダストリアル・アーツは、将来就職する職業とは関係なく、普通教育の重要な一部門として、産業の各種の技術について学習することであり、産業科とも称すべきものである。

三、インダストリアル・アーツの目標

現在、インダストリアル・アーツの教師や指導者たちによつて最も一般的に承認されている目標は、アメリカ職業教育協会によつて最近発表された「九の目標」である。

- 1、**産業への興味** 産業生活および生産・流通の方法や問題について、おのおのの生徒に積極的な興味を發達させること。
- 2、**眞価を知り有効に使用すること** よいデザインやよい技術の眞価を知るように、また生産物を上手に選び、有効に使う能力を、おのおのの生徒に發達させること。
- 3、**自己訓練と指導性** 遭遇するいろいろな実際的な状況のもとにおいて、自己訓練と賢く処理する習慣をおのおのの生徒に發達させること。
- 4、**共働的な態度** 他の人たちを助け、よろこんで集团的なしごとに参加するよきな態度を おのおのの生徒に發達させること。
- 5、**健康と安全** 健康と安全について、のぞましい態度と実践を、おのおのの生徒に發達させること。
- 6、**仕事をなしとげることへの興味** 有用な仕事をやりうるといふ誇りの感情と、余暇を眞價あるようにおくるよきな興味を、おのおのの生徒に發達させること。

7、規則正しい実行 どの仕事についても、規則正しく完全に有能な実行をなす習慣を、おのおのの生徒に発達させること。

8、製図と設計 製図についての理解と、製図によつて考えを表現する能力を、おのおのの生徒に発達させること。

9、技能と知識 ごく普通な道具や機械を使つての標準的な技能と組みたてや、修理の普通のタイプに含まれている問題についての理解を、おのおのの生徒に発達させること。

以上の目標規定は、アメリカ職業教育協会が、一九三四年にきめた「十二の目標」に検討を加えて改正したものである。この目標規定が、アメリカの中学校のインダストリアル・アーツの目標として支配的であるといわれている。

四、カリキュラムにおける位置づけ

学校において、物理・化学・生物などの科目が科学の分野を代表するように、インダストリアル・アーツは産業社会の分野を代表するものである。学校は青少年にたいして現代の生活に適應できるような能力を身につけさせなくてはならない。そのためには現代生活の中核を構成している産業についての教育がぜひ必要である。

学校への産業のとりいれかたは、十八世紀の産業、すなわち手工的形式をとりいれるのではなく、現代社会にある産業方式の正確な反映でなくてはならない。もちろん小学校においては、手工芸的な作業をすることの意義もあるといえよう。その理由としては、第一に手工芸的な作業によつて、子供たちは目と手の訓練をなし、芸術的な表現力を養うことができるとしているし、第二には現代文明の発達にいたるまでのある時期の技術を知ることの意味があるとされ

ている。

しかし現代の社会において、まもなく生産者となる青少年の教育を行う中等学校においては、現代産業の生産方法や資材が、インダストリアル・アーツの中核となるべきである。いいかえるとインダストリアル・アーツの教育において、その方法、使う資材、プロジェクトはいうまでもなく、クラスの組織も、現代産業において行われている人の組織を、できるかぎりとりいれなくてはならない。このような形でインダストリアル・アーツの教育がなされるとき、最も価値ある教育といえよう。

インダストリアル・アーツのよく行われている学校では、教師は工場管理者の役割りを演じ、クラスは工場生産組織のように組織されている。工場では工場長、安全管理者、資材係長、人事係長、給与係長といった職長がいるが、学校でもそのような職長をつくつて教師は生徒の職長と関係をもつて授業を進めていくべきである。生徒たちは、このようなクラス組織によつて活動することによつて、現代産業の生産組織を理解することができる。しかもプロジェクトが、大量生産方式でとられている分業を行うようなグループ・プロジェクトであれば、生産組織を理解するのになお一そう高い価値をもつといえよう。しかしとりあげる工場生産組織は、現代産業の生産方式を真に再現する典型的なものではなくてはならない。

つきにとりあぐべき教材は、最新の科学的知識の含まれているものでなくてはならない。現代産業の最も著しい一つの特徴は、生産に應用される科学的知識が時々刻々に増加していることである。したがつて、なんでもよいから、ただ物をつくることを経験させればよいといったところに、インダストリアル・アーツの教育はあるの

でなくて、その教材は、自然科学・社会科学を含むようなプロジェクトをえらび、生徒のひとりひとりに科学的原理や知識を理解させるように指導すべきである。

五、インダストリアル・アーツと道德教育

インダストリアル・アーツは、道德教育に重要な価値をもつている。単なる徳目の解説によつて道德教育の効果があがらないことは自明のことである。インダストリアル・アーツが道德教育に力める特長をあげるとつぎのようになるであらう。

1、しごとを正確に計画し遂行する習慣や態度の啓発に役だつ。作業室や製図室のしごとは、材料の選択から完成品とするまでに、オペレーションを詳細にわたつて計画し遂行しなくてはならないので、重要な道德的価値が得られる。

2、しごとにおける誠実さを養うのに役だつ。ある一つのプロジェクトにおいて、一片の材料がインチの正方形でなければならぬときには、縦横十インチの正確な正方形でなくては、完全なしごとができない。このことはグループ・プロジェクトにおいてとくに重要である。もし教師が厳格でなかつたり、不注意であつたりすると、生徒のしごとにたいする不誠実さを奨励するようになるといえる。

3、作業場における教育は、共通の財貨を尊重する態度、社会的な共働の態度、寛大な態度を養うに他に類のない機会を提供するのである。

とくにグループ・プロジェクトにおいては、ごく価値が大きい。たとえば一人の生徒が受持のしごとに失敗すれば、グループ

のしごとの結果をそこなりし、グループのしごとの結果には、グループの者が平等に責任を負わなくてはならないことについても生徒のひとりひとりが理解するであらう。

4、自己管理 (Self-Management) を養うに役だつ。しごとが上手にできあがるには、機械・道具などをとりあつかうプロセスが正確でなくてはならない。それには自己管理が重要である。この自己管理は機械・道具のとりあつかいのプロセスに必要なばかりでなく、数的計算、材料の選択やとりあつかいにおいても重要である。たとえば忍耐づよさのないこと、腹たちまぎれにしごとをすること、注意散まんといったことは、作業には禁物なのである。自己管理が恒常的になされなるときに、作業がどうなるかは自明のことであらう。

六、職業教育・職業指導との関係

インダストリアル・アーツの学習によつて、生徒たちは自己の力や興味をテストするとともに、のちの職業的工業教育において成功を約束するような技能と技術的知識を啓発することができるのである。いいかえるとインダストリアル・アーツは職業指導に役だつとともに、職業教育の基礎になるのである。

このばあいインダストリアル・アーツが職業指導に貢献する価値は、一般の教師には過重評価されがちであるが、その価値はつぎの二つである。

1、機械的なしごとにつくかどうかをきめるばあい。

2、機械的な職業のどのような種類を選んだらよいかというばあい。

なお、職業指導を効果的にするためには、見学、映画、クラスの話し合い、調査レポートの報告会などによつて、職業情報の提供が重要である。

つぎにインダストリアル・アーツは職業的工業教育の基礎的訓練として重要性をもっている。インダストリアル・アーツの学習によつてよく指導された青少年は、将来、職業的訓練をうけるばあいに技能を習得するのに容易である。

しかしインダストリアル・アーツの職業教育にしめる効果の如何は、教師の指導力と技術におうところが多い。したがつてアメリカの中学校では、最近、産業教育専門の大学を出て、現場経験をもつような教師を、インダストリアル・アーツの教師として求める傾向にある。

七、学習指導要領の例

インダストリアル・アーツの学習指導要領について、すでにフロリダ案については、前掲の参考文献「教育第三卷」「職業指導の心理」のなかに紹介されているので、ここでは、ロスアンゼルス案を紹介することにしよう。紙数の関係で全部にわたつて詳細な紹介ができないので、その一部を簡単にのべることにしよう。

1、定義 インダストリアル・アーツは、いろいろな生活課題とむすびつけて材料・道具・機械をあつかう一般教育の一部門である。ここでいう生活課題というのは、職業的興味の発見、道具や機械を使い熟練の啓発、家庭や学校の器具を保守すること、工業製品の上手な選び方と使い方、趣味的なものをつくる活動を意味している。

2、生徒に経験させる領域はつぎの七つである。

農業（栽培・家庭園芸・小動物の飼育など）

電気（電信・電話・ラジオ・配線・モーター）

一般金属（板金・金工・金属工芸・鍛造・鑄造・熱処理・機械作業・溶接）

手芸（ポケットナイフによる細工・木工彫刻・皮細工・織物細工・石膏細工・金属細工・プラスチック工など）

製図（機械製図・スケッチ・建築設計図・測量図）

印刷（植字・印刷・製本・リノエウム印刷・謄写印刷・模写模様の浮彫りなど）

木工（キャビネット製作・木工機械作業・大工仕事・模型製作・研磨など）

以上の領域のしごとをつぎのように配当する。

第七学年前期 製図・手芸あるいは農業

第七学年後期 木工・電気

第八学年前期 一般金属・印刷

生徒は一年半に六コースを修了すると、後の一年半は一〜二のインダストリアル・アーツの活動を選択して実習することになつてゐる。

必修の六コースは、各コースごとに十週間継続のコースであり、毎日一時間をこれにあてることになつてゐる。学習の方法としては二つの方法があり、一つは生徒が道具・機械・材料によつて実際に仕事をする方法であり、第二の方法はクラスの話し合い、産業施設の見学、映画、産業展覧会の見学などによるものである。

3、参考として学習指導計画の例をつぎにしめそう。

製図(十週間)

第一週〔職業的知識〕産業界における製図の重要性(説明やクラスの話し合いによる)

〔一般教授〕製図についてのイントロダクション
用具の使用法

〔問題〕現尺による製図

第二週〔問題〕現尺による製図(前週の継続)

文字

第三週〔問題〕投影図(先の現尺図の第一角法または三角法)

青写真をよむこと(クギ箱)

第四週〔問題〕投影図(前週の継続)

第五週〔職業的知識〕機械図(範囲・必要条件・機会)

(説明やクラスの話し合いによる)

〔問題〕円の製図(滑車)

青写真をよむ(L腕金)

第六週〔問題〕展開図(カードつづり箱)

図表とグラフ(学校出席 降雨など)

第七週〔職業的知識〕測量製図(範囲・必要条件・機会) (説明や

クラスの話し合いによる)

青写真をよむ(市の細部地図)

〔問題〕配線図

第八週〔問題〕製作するプロジェクトの工作図

第九週〔職業的知識〕建築設計図(範囲・必要条件・機会) (説明

やクラスの話し合いによる)

青写真をよむ(間取り図)

〔問題〕家の設計図

第十週〔問題〕前の製図のトレースから青写真をつくること。製図作品のための装飾カバリのデザイン。ポンチの製図など。

以上は製図コースの学習指導計画の概略であるが、これと現行の職業・家庭科の学習指導要領の単元構成の例と比較したばあい、その差異の著しいことに気づくであろう。このロスアンゼルス市の学習指導計画案をみても、現行の職業・家庭科の単元構成のしかたが、技術学習として欠陥をもつことは明らかかといえよう。

なお各コースの詳細にわたることができなかったが、各コースの内容については、資料として逐次、機関誌に紹介していく予定である。(国学院大学助教授・本研究會幹事)

全国各地で地方研究協議会

職業教育研究会主催(詳細は次号)

産業教育中央審議會答申案による教育内容について、本研究會では、目下着々研究を進めているが、七月中旬までには、必修としておさえるべき最低線が打出せると思ふ。ついでには、それに関する検討ならびに、教材として取入れべき教育内容を如何にすべきかを、地方教育實際家に意見を求めるべく、八月夏休みを利用して、全國約十カ所で「地方研究協議會」を開催する予定。会場その他詳細は次号で發表する。出席希望者は、早目に申込むように願ひたい。

(研究部)

基礎学力が低下したと嘆かれている。

その基礎学力というのは、何をさすのであろうか。実業家にとつてはそれが問題である。既成の教育をうけた父兄や、われわれ大人が見る場合、なるほど学力は確に低下している。敗戦の混乱と社会不安からアプレ・ゲールが生れ、植民地化に都合のよいアメリカ文化が輸入された結果、教育もまた落着きを失つて、時流におし流されて来た。

学力の低下は、学童にも現われたが、政治家にも実業家にも、そして社会人一般にも現われているといえないだろうか。寧ろ国家全体が教育の中心を失つて、断片的、ダイジエスタ的学力をあわただしく吸収する傾向に陥入っている。学童の基礎学力低下を嘆く前に、日本社会の独立が問題となるであろう。そうした視点からのみこの問題は正しく把握されると思う。

○
そうした視点に立つ時、読書算だけを基礎学力として莫然とおさえることは、実際現場に立つている教師にとつて納得できないのは当然である。

ある教育実業家はこういつた。「基礎学力の低下といつても、昔の読書算にかえる

ことを意味してはいけぬ。現代に生きるために、今の教育は他の点で昔になかつたものがあり、それも基礎学力の一部として学童は把握しているのであるから、学力という言葉はあてはまらない。むしろ能力というか、実力というか、もつと現代の歴史的段階から見たものでなくてはならないと思つている。つまり実践的な力によつて、読書算の基礎学力が養われていくべきで、それは社会改造に結びつけられた教育力でなくてはならないと思う。」

◇基礎学力と実践力◇

これは実に示唆に富む言葉である。

いきなり読書算（よみかきそろばん）というのと、誰しも寺小屋時代を連想する。また学力低下といえば、明治以後の詰込み主義教育に追いつくことを意味するようにとられ勝ちである。

従つて基礎学力というためには、現代おかれている日本の社会において、何が基礎学力として必要かを設定して、その方向に教育の歩みを進めることによつて、打ち出されなくてはならないであらう。

○
一つの言語、一つの教を学力として身につけるといふことは、決して切り離されたものではなく、一つの文、一つの課題として構成されているのである。だからといって基礎的な分析をなせずに、構成されている分子の把握をぬきにして、生活的課題として、現象面にだけ重点をおく、アメリカ渡来の生活学習は、日本の国民を科学的に向上させるものではない。

われわれが現在おかれている社会は、義理にでも良好だとはいえないが、世界的に一つの段階に立つていることだけは事実である。しかも敗戦から立ち上つて、平和と独立への道を歩まねばならない国民的命題は、その中心的使命であり、その障害を排除しなくてはならないことは、国民の行動綱領でなくてはならないであらう。

その場合の基礎学力とは、単に切離された読書算ではなく、経済・社会と結びついた実践力（基礎技術）によつて駆使されるべきそれではない。この際必要なことは、現代わが国がおかれている歴史的立場から打ち出された基礎能力の内容如何である。その科学的研究を望むこと切なるを感じる。（中山菅男）

基礎学力・生産教育・生活綴方

——教科研全国大会の記——

矢野敏雄

三、生産教育

生産教育の問題に関する討議に入るに及んで、本大会は最高潮に達したと思われた。教科研が「平和と生産のための教育」のテーマをかかげて進んで来た一年間の歩みが、現場側からの、自由な忌憚ない意見を通してかえりみられたわけである。

○生産教育が目指すものは何か。

○生産教育の対社会的存在意義と理由はどこにあるか。

○生産教育が現場の実践に取り入れにくい原因はどこにあるか。

生産教育に対する反対者の質問は、この三つを交々織りなした疑問から発せられたよりである。しかもそれらの質問には、生産教育の実践から生れた疑問が少いように思われた。このような大会に期待されることは、教育実践によつて生れた正しい生産教育の内容その指導方法などに関する具体案を各自持ち寄り、批判検討を経て、生産教育の明確な基本線を打ち出すことにあるのではなからうか。

もし生産教育が生産ということを教育の直接の目標とするものであると考えているとし

一、まえがき

さる三月二十七日から三日間、教育科学研究会第二回全国大会が福島県飯坂町で開催され、私も参会する機会を得た。全国からの参会者三五〇名の熱烈な討議の中から、主要な問題点となつたことについて、私の感じたままをのべることにしよう。

二、基礎学力

一月の日教組大会では、小中学生の国語算教の能力低下が報告され、戦前と比較して二年の遅れを見せると報道されていた。私はこの問題を教育実家はどうか考え、それを実践的に克服しようとしているかを本大会に期待したが、たゞ学力の低下を指摘した発表はあつたが、その克服の実践についての報告はなされなかつた。

読み書き算の能力、いいかえれば基礎学力の低下を克服することは、抑圧と困難の多々ある現場にあつて、「日本の子供」の将来を憂える教師の、大切な問題として、一日も早く実践がなされなければならない。「一プラス一が二、山という字、これを教えることが第一だ。これだけはどうな子にも教えねばならぬ。」(無着成恭氏)「基礎学力もつけない教育では駄目だ」というと、すぐ逆コースだという。この学力もつけないで果して何ができることばときいてよいだらう。

現在、基礎学力の問題は大きく浮び上つている。しかし、新しい基礎学力の内容をどのよりの視点にたつておさえたらいいか。これに関して、二日目の研究討議「平和と生産のための教育」に関連して、やや明確に視点が打ちだされたのである。

たら、それは「増産教育」であり、戦後展開された生産教育の理念の誤解であろう。また生産教育理念への無知から「増産教育」を生産教育と称して実践している学校もかなり多い。しかも最近においては、社会状況の変化により、生産教育の本来の理念が次第にゆがめられて来ている。

「昨年の『教育』十二月号に書いた、生産教育の概念については繰り返さし述べないが、本来生産教育を主張した理由は歴史的事情によるものだ。二十六年までは消費生活中心の新教育であり、それに反対して主張したのであったが、朝鮮事変以後、軍需産業のための『生産教育』におきかえられ始めた。(宮原誠一氏)ということから考えあわせても、問題の視点が曇らされることのないよう注意しなければならぬ。そこで、本来の生産教育はどうこれに対処したらよいか。もしも生産教育の正しい理念を具体的に裏づける努力がなされなかつたら、教育は産業に従属する「増産教育」へとおし流されるであろう。この大会において、遠山啓氏のことばは、これに対する一つの建設的見解として記憶された。

「生産と関係する教材が、教科書を見ても

殆ど見当らない。これが宮原氏のいわれた生産教育主張の理由だろう。ところで、生産に関係するのは学力の問題である。……われわれの教育科学運動はまだ哲学的・文学的・芸術的である。実験もまだ行われていない。われわれは生産と関係する学力の問題を实践的に解決すべきである。」とは、生産教育と基礎学力についての一方向を指示したものといえよう。

四、生活綴方

この大会において目だつた問題は、生活綴方の教育実践であろう。開催地が生活綴方の発祥地といえる東北の入口だつたためか、発表者の大半が綴方教育をやつてゐることを知り、その自信と熱意には敬服感を禁じ得なかつた。表現が方言で満ちあふれている詩や文を作つて、やがてそれらが編まれて文集にまなつてゐる。都会地の綴方教育が全く等閑視されているのに対し、ともかく綴方を書かせて文集まで持つてゐることは教師の努力の尊い結晶であろう。

だが、ここにも地域社会の孤立性という欠陥が指摘されないだろうか。地域社会の孤立化を脱却せんがためにやつたしごとが、結局

は無意識的にもう一まわりの孤立化を余儀なくしていることになつていないだろうか。各地独特の文章表現の力を結集して文集を作り重ねて行くしごと、そのことだけに意義を感じるのだから幸いである。

生活綴方教育は多年培つた伝統と風土の上に、今なお根強い力をもつてゐる。その生活綴方がいかなる目標のもとに、いかに教育がなされているか。子供達が地域社会に生きていかにものを見、聞き、読んで、考え、そして書くことによつて表現した綴方が、どの程度に批判的合理的な科学的判断力を子供達にもたせることができたか。そういう綴方教育が他の学習にどのように反映しているか。大会における発表にこのような具体的な実践報告を期待することは無理だつたかも知れない。しかし綴方教育が学級内における子供達の心理的カタルシスを行つただけにとどまつてゐるならば、それは「書かせればよい綴方」教育であり、教師の自己満足による感化的教育しか、行おうとしても行えないことになるといえよう。(国学院大学教育学研究室)

x x x

研究会だより

▽定例研究会——毎月第一、第三の土曜日午後三時からの定例研究会は、テーマを定めて行われている。五月十六日には約二十名参集した。今回は特に六月二十七日の予定、地方から上京の方は、電話銀座座〇〇八二番へおたづね下さればわかる。

▽地方研究講習会——五月六日仙台市宮城野中学校を皮切りに、十八日鳥取県東伯中学校、二十三日群馬県西谷田中学校、二十三日山形県西村山郡左沢中学校、二十七日新潟県大瀧中学校で開催された。六月は千葉県君津中学校、栃木県烏山中学校の予定。何れも、産教中央審議会案を中心に、文部省事務官、本研究会関係者などが出講して説明している。

▽地方ブロック協議会——七、八月の休みを利用して、全国各地でブロック別の協議会を開催する計画は着々進行し、現在十カ所ほど内定している。次号には、その計画案が発表できると思うが、熱心な読者は、今から準備しておいて、早目に申込んでほしいと思う。

▽専門研究部会——本研究会内に専門研究部会を設け、審議会案に基づく教育内容（基礎技術）の研究をはじめている。具体的な案も七

月中にはまとまり、地方協議会にかけて討議する予定である。着実な実務的なわれわれの研究が、全面的におし出される日も、そう遠くはあるまい。地方在住の実務家の研究実績も十分反映させたいと思うから、どしどし研究を進められたい。

▽以上のような研究会の活動は、漸く全国的な関心を高めて来て、誌代の納入、通信、研究への参加など、最近非常に活ばつになつて来たことは、誠によろこばしいことである。

編集後記

▽文部省事務官島田氏が、お忙しい中を特に稿をよせられたことを感謝するが相当問題がふくまれている。

▽中村邦男氏のもの、農耕における技術分析によつて基本的な点を追求した研究の成果によるもので、ただ漫然と農耕の仕事を行つて来た、従来の学校農業のあり方への警鐘といえよう。われわれは、こうした研究が、特に農耕に係る深い農村で活ばつに進められることを期待している。

▽アメリカにおけるインダストリアル・アイツは、これまであまりわが国に紹介されていないが、産業教育としての技術が、教育的に

重視されている。清原道寿氏が多くの文献によつてそれを紹介した。最近の力作である。▽日本独特と某氏が名づけた現在の職・家の学習指導要領と比較して見て、いかにその差が甚しいか。読者各位は十分研究の資料とされることを望む。

▽その他僅か二十四ページながら、ピリツときかしたサンショの味を十分かみしめてほしいと思う。

▽五月十八日から三日間、東京で開かれた全国指導主事会議で、例の産業教育中央審議会案が討議され、中々面白い議論が白熱的になつたかわされたそうなる。

▽さきに本研究会を出した「解説」が注目され、非常に要求されているのも、その辺に由来するらしい。ともかく、こうして中学校の職・家料が活気を呈して来たことはうれしい。（編集部）

昭和28年5月30日印刷
昭和28年6月1日発行 【金二十円】

編集者 池田 種生

発行者 池田 種生
立川ビル内

発行所 職業教育研究会

電話銀座座〇〇八二番
振替東京七七一七六番

(新刊)

大分大学助教授 後藤豊治
宮城県指導主事 小野禎一 共著

職業教育研究会推薦図書
日本図書館協会選定図書

職業指導新論

A5判上製本
二百九十余頁
定価 三〇〇円
(〒四〇円)

▽推薦の言葉△

(前略) 小野指導主事は私の最も親しい同人の一人で、理論的研究を積むと同時に、現場においてそれを忠実に実践している実践家です。現今最も関心事である二三男指導に焦点をおいて、豊富な実例を留意して平易に書いていられる。そのみならず広く一般青年の職業指導に好適な資料を提供されているものとして、広くおすすすめしたい書です。

文部省職業教育課 水谷 統夫

職業指導も現在のままでは少しも発展しない。後藤氏は長年の実践と、科学的研究に基づいて、現状を批判し、将来のあり方を示そうとしている。これまで出た職業指導の本に見られない新理論が展開されている。ぜひ一読をすすめたい。

東京都教育庁主事 杉山 一人

(目次概略)

前篇 職業指導の現状(小野氏執筆)

- 第一章 職業指導の計画と実践
 - 第一節 職業指導の組織
 - 第二節 職業指導の年間計画
 - 第三節 職業指導主任の任務
 - 第四節 諸調査と諸検査
 - 第五節 校外実習
 - 第六節 現場見学
 - 第七節 職業情報の提供(以下略)
- 第二章 小学校と高校の職業指導
- 第三章 中学校職業指導の留意点
- 第四章 職業指導の反省
- 第五章 農村青年職業指導の課題
 - 第一節 現世相と農村二・三男問題
 - 第二節 農村における職業指導の必要
- 第三節 農村職業指導の基底にあるもの
- 第四節 農村職業指導の課題
- 後篇 職業指導の問題点(後藤氏執筆)
 - 第一章 職業指導とは何か(項目略)
 - 第二章 わが国職業指導の史的発展に見られる特質と問題(項目略)
 - 第三章 職業指導の各分野における問題
 - 1、職業情報提供の意義
 - 2、啓発的経験と自己調査
 - 3、個人資料蒐集の意義
 - 4、職業相談における問題
 - 5、配置(あつせん)の問題
 - 6、追隨指導の問題
 - 第四章 職業指導計画
 - ガイダンス・プログラム
 - 1、職業指導計画の基本的視点
 - 2、職業指導計画の編成(以下略)

◎本書によつて新しい指導理論を!

東京都中央区銀座東5の5
振替東京83314番

立川図書株式会社

職業教育研究会編纂教科書

教科書番号	学年	教科書名	判型	定価
七中二〇職	一年	楽しいしごと (家庭向)	二A一八5	80円
八中一三職	二年	新しいくらし (家庭向)	二A二四5	80円
九中一三職	三年	生活の設計 (家庭向)	一A一九八5	80円
七中二一職	一年	しごとの喜び (都市向)	二A二五二5	88円
八中一四職	二年	働くちから (都市向)	二A二五四5	88円
九中一四職	三年	将来にそなえて (都市向)	二A二三六5	88円
七中二二職	一年	村のしごと (農村向)	二A二四八5	88円
八中一五職	二年	大地とともに (農村向)	二A二五四5	88円
九中一五職	三年	明かるい農村 (農村向)	二A二五六5	88円
七中四三職	一年	将来の希望 (改訂版)	九A八5	35円
七中〇五職	二年	自己をみつめて	八A六5	30円
七中〇六職	三年	進路の決定	五A四5	20円

◎御採用校増加!

職業教育研究会編纂、弊社刊行の上記の教科書は、特に文部省指定校、モデルスクール、職業・家庭科の重要性に深い関心をもたれる多くの中学校で御採用になつていますが、産業教育振興法による職・家科の進展に伴い、一層本教科書採用校が増加されています。つきに御採用下されし各校の御見解の一部を紹介いたします。

- 1、正しい基礎技術を取り入れている。
- 2、資料が豊富でムダがない。
- 3、(職・家科の教科書は読本ではなく、資料として役立たせるものとの見解) 農村向に職業科教材が豊富である。
- 4、家庭向に職業科教材が豊富である。
- 5、インフォメーションがよく行きとどいている。
- 6、さしえが多く説明がくわしい。

以上のような関係からページ数の増加もまぬがれないところですが、弊社としては、できるだけ定価を切り下げ、御採用の熱意にこたえてきました。来年度も定価はすえおきとして、値上げその他の変更はしない方針です。

また誤りや資料の古いものは、文部省の許可範囲で改訂いたしました。

何卒来年度も、本教科書御採用の栄を賜われますよう、切に願います次第であります。

◎御採用校へは教師用「指導の要領」をもちれなく随呈します。

発行所

33
立川

東京都中央区
銀座東5の5

立川図書株式会社